

口頭発表「愛情をもって飼育にあたる子どもたちを見て 考えたこと」

小椋孝史



1 はじめに

表題に掲げた「愛情をもって飼育にあたる子どもたち」とは平成17~18年度に私が担任した4年2組39名の子どもたちのことです。この子たちが飼育を担当する前の数年間は、本校の学校飼育があまりよくなかった時代でした。当番の児童は平気で仕事を忘れるし、教員も熱心に飼育に携わっていたとはとても言えません。本校の飼育活動はその年の4年生、及び4年担任のうち一名の教員で担当しており、子どもたちは輪番制で飼育活動にあたります。本校の飼育小屋は校庭を挟み校舎から最も遠い場所に位置しています。児童の日常の生活スペースと離れるほど、さまざまな困難が発生します。この数年は、その困難をうまく乗り越えることができていなかったわけです。

2 熱心な飼育が実現できた要因

では、なぜこの4年2組の子どもたちは、同じ条件下にありながら熱心な飼育を実現できたのでしょうか。まず、この点について考えました。

(1) 4年生以前の経験の有無

私はこの子たちを3・4年の2年間担任をしました。担任した初年度、子どもたちは3年生なので飼育と関係はありません。しかし担任の私が毎日飼育小屋に足を運んでいたので、面白がってぞろぞろとついてきました。

私が毎日飼育小屋に足を運んでいた理由は、当時パストレラ病にかかっていたウサギのブラウンがいたからです。前年の平成16年度から、私は獣医師の先生の指導を受け一日三度の目薬をブラウンにさしていました。

した。ブラウンは私以外の人間からの目薬は拒否していたので、この仕事は何年生の担任であろうと関係なく、私の仕事になっていました。私に付いてきたクラスの子どもたちは、ブラウンが私に気づいて駆け寄る姿や、頭をなでると甘える仕草を見て、大喜びをしていました。

当番の四年生は昼休みに活動することになっています。初めのうちこそ面白がってやっていたこの子たちの一つ上の学年の子どもたちも、そのうち昼休みは遊びたくなり当番に来なくなり始めます。4年担任には、今日の当番が来なかつたことを伝えますが、あまり改善はしませんでした。4年担任も、私(小椋)が飼育小屋に通っているから自分までもが行く必要はないと思っていたでしょう。しかし、子どもは自分が仕事をしている様子を誰よりも担任の先生に見てもらいたいと思っています。担任でない私が見てあげても、それは担任には敵いません。こうして当番が来ない日は徐々に増えていきました。

掃除も給餌もされないニワトリとウサギを放ってはおけないので、4年生が来ない日はすべて私がやるようにしました。私が一人で掃除をしていると、私についてきた私のクラスの子どもたちが「どうして四年生来ないの?」とか「今日も四年生いないの?」と、言い始めるようになりました。そのうち「私たちが掃除しちゃダメですか?」とも言い出しましたが、いくら何でもそれは上の学年に失礼なので「みんなには四年生になったらお願ひするからね」と話し納得させていました。

やがて冬が来て、ウサギは三年生教室近くの普段は使っていないトイレに引っ越しました。岩手の冬は寒いため、トイレの水が凍結しないようにパネルヒーターで暖めており、ウサギが住むにはちょうどよい温度になっていました。自分たちの教室の近くにブラウンが住んでいることは子どもたちもうれしかったようで、ブラウンをびっくりさせないように、廊下で騒がなくなるなど、子どもにとってもよい効果をもたらしました。しかし、ブラウンの病状は悪化していき、ついにブラウンは亡くなりました。私も子どもたちも一緒にになって泣きました。

こうして3年生の一年間が終わりました。これが、この子たちの熱心に飼育の理由の一点目です。担任の私に付いて校舎から遠く離れた飼育小屋に通っていたこと、そこで人間に甘えるブラウンや、気持ちよさそうに散歩するニワトリを見て、人間のお世話がどれだけ動物を喜ばせるのかを見ていたこと、さらに私が一人で掃除する姿を見て、当番が仕事をしないと他の誰かにしわ寄せが来るということも学んだことでしょう。さらに、ブラウンとの悲しい別れも通して、私と一緒に涙を流しながら、命が失われる悲しさ・悔しさを、子どもたちなりに感じたのだと思われます。この子たちは3年生の一年間で、自分たちが飼育をするという気持ちを少しずつ高めていました。4年生になった途端、さあ今日から飼育当番ですよ、と言われるのとは、意識が異なっているのは当然と言えましょう。

(2) 負担軽減と動物と遊ぶ時間の確保

この子たちが飼育担当になる前年に、鳥インフルエンザ騒ぎがありました。それを受け、学校のニワトリは処分する、と当時の校長が言い出しました。校長を説得しようと、インターネットで情報をかき集め、「学校動物飼育研究協議会」のサイトの情報を探し、校長に処分撤回を求めました。「毎朝、私（小椋）が掃除をしたところを、昼に子どもが掃除するのであればよい」という変な条件を付けられはしたもの、とりあえずニワトリは学校に残ることができました。このような経緯があり、私は毎朝ニワトリ小屋の掃除をしていました。

このことを通し、私自身も初めて気づいたことがあります。それは、汚いところをきれいにするのは相当に大変なことです。少しだけ汚れた大体きれいな所を掃除するというのは子どもにとって実に楽しいもので、勤労意欲を強く掻き立てることでした。

さらに、朝に一度掃除した飼育小屋の掃除にはさほど時間がかかりず、その分当番の子はにわとりと遊ぶ時間を確保できました。今までの四年生は、どんなに掃除してもきれいになる気配のまるでない飼育小屋を必死で掃除し、大してきれいになったと言う満足感もなく疲労感とともに昼休みを終えていました。もちろんニワトリと遊ぶ暇などありませんでした。4年2組が、「飼育を好き」と強く感じたのには、例年とのこのような違いも大きかったと思われます。

(3) 担任の飼育活動への関わり方の変容

以前の私も含めたそれまでの四年担任は、責任感を育てるために、きちんと子どもたち自身の手で最後までやり通させなければ強く考えていました。当番をしなければ厳しく叱りましたし、当番をしない児童には、その日の放課後に居残りをさせてでも、最後までやるように指導してきました。もちろん私もそうしましたし、それが正しいと信じていました。

しかし、病気にかかりいつ死ぬかも知れないウサギと毎日接し、鳥インフルのせいで処分されかかったニワトリを守りながら、私は子どもの責任感がどうこう以前に、目の前にいるウサギやニワトリを守らなければ、という気持ちの方が強くなっていきました。ウサギやニワトリさえいてくれればそれで良かったですし、ウサギやニワトリを守ることが自分の仕事だと思っていました。そのため、子どもが当番に来なければ自分がやればいいと思いましたし、子どもたちの飼育活動を、私がやるべき仕事を子どもたちも一緒にやってくれている、という感覚でとらえていました。そんな感覚だったため、飼育している子どもに正直な気持ちで「ありがとう」と言うことができました。

しかし、子どもが掃除する前に私が掃除し、子どもが当番をしなかったら私が代わりにやればよいと思っているような飼育が本当に「教育」なのかと、同僚から批判もありました。

この点については、私は自分のとった行動を動物と関わる一人の人間として間違っていないことに自信を持っています。それは、4年2組の子たちが、この一年間当番をやらずに私にやらせたことが一度もなかったからです。

学校には、枯れた花がいつまでも花瓶にささったままの教室、魚が水槽の中で腹を浮かせている教室、虫かごが異臭を放つ教室などがあります。そうなってから担任は「ほら、生き物係がちゃんとやらないから！」と叱ります。これは、一つの教育的手法なのかも知れませんが、これで本当に子どもは育つのでしょうか。それよりも、学校において子どもの最も身近な大人である担任が、生き物を大切に思う態度を示す、行動を起こす。このほうが、ずっと教育効果が高いということを、この4年2組の事実が示していると思います。

3 飼育をがんばった子どもはここが違う (1) 調査について

飼育活動を熱心に行ったことは、その後の子どもたちにどのような影響を及ぼすのでしょうか。このことを調べるために、19年度の文科省の全国一斉学力調査で使用した質問紙調査の項目を用い、分析にあたりました。

昨年の6年生、そして4年生のときに隣のクラスだった4年1組の子どもたちと比較し得られた4年2組だけの特徴的な傾向を紹介します。

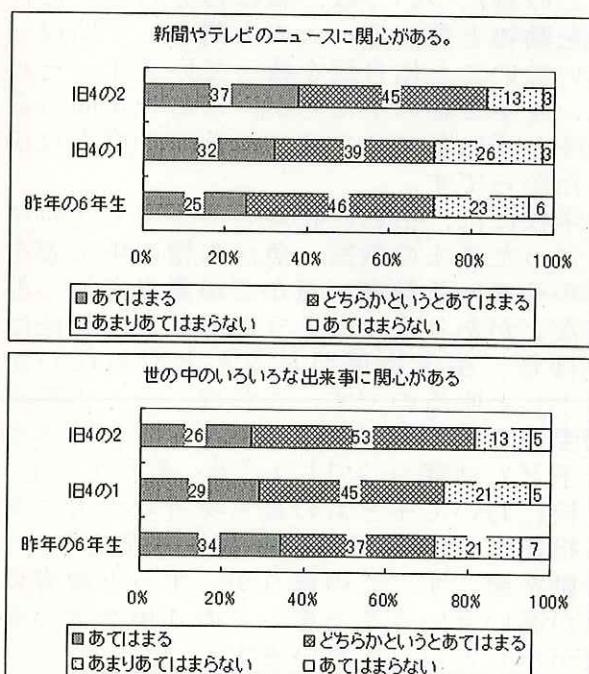
(2)自分以外のことにも関心がある

「新聞やテレビのニュースに関心をもっている。」「世の中のいろいろな出来事に関心をもっている。」という2つの質問のどちらにも特徴的な傾向が見られました。

現在、自分及び自分に関わること以外には関心をもてない子が増えているように思えるが、この子たちはそうではないようです。

(3) 学習を素直に受け入れ素直に感動できる

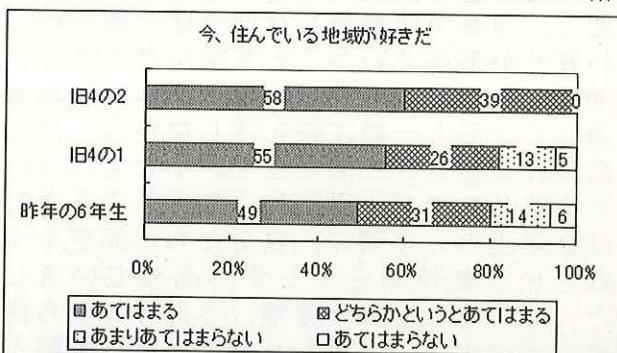
「今、住んでいる地域が好きだ」という質問に対し、4年2組の子どもたちは誰一人として否定的な反応を示しませんでした。これは総合的な学習が充実していたことも確かにありますが、同じカリキュラムで総合的な学習を行っていた旧4-1、及び昨年の六年生の傾向と開きがあることから、学習したこと、活動したことなどを素直に受け入れ素直に感動できる子どもたちだ、と言えると考えます。



(4) 4年生終わりに書いた子どもの作文から毎年、四年生は文集を出しています。飼

育のことを一年の思い出としてあげた子の人数の多さ自体が異例でしたが、その内容から多くの学びのあとが見受けられます。

○一番の思い出はニワトリ小屋の消毒ですね。ぼくはおもにゴミ箱の消毒をがんばっていたわけですが、それがよごれが落



ちないのなんのって！けれどきれいにすればニワトリたちも健康に、喜んでくれるのかなと思ってがんばっておりました。
(智博)

○ニワトリ小屋は、ちょっとくさいけどみんなで協力し合ってくださいのもがまんしてやりました。(将太)

○天気が良くなると3びきは、外に出て楽しそうに気持ちよさそうに遊んでいます。しいくをやっていてこんなに楽しいのは初めてだと思いました。(大樹)

○ぼくたちはニワトリのことが好きです。飼育は大変だけどみんなそれをがまんしてやっているのでニワトリもうれしそうです。ぼくたちとニワトリは友達みたいでした。(優基)

○初めのうちは飼育ってこんなにむずかしいものなのかと思いましたがやっていくうちに飼育っていいなと思いました。にわとりもぼくたちが来る時は喜んでいました。その時ぼくはにわとりってかわいいなと思いました。(聖樹)

○外に出ているニワトリを集めて小屋に入れるのがとくいです。でも、変な方向から行くと集める時にげちゃいます。「行っちゃダメ～」と思っちゃう時があります。みんなと先生もがんばったからニワトリも元気にすくすく育ってくれたと思います！(麗)

以上に紹介した6人の児童の作文からは「働くことの大切さや苦労が分かる」「働く喜びを知る」ということを飼育活動から学んだことが伺えます。

○ニワトリはえさがなくても何日かはだい

じょうぶらしいですが、水はないとダメらしいです。冬は寒いので、水がこおつてしまうので、水に気をくばりました。

(亜耶)

○ニワトリを飼育小屋に入れるのが大変でした。みんなはニワトリを入れているのにわたしだけニワトリにきらわれているようでした。でもなれてくれるといニワトリも飼育小屋に入ってくれました。うれしかったです。(遥奈)

○ニワトリが外に出るとあなたをほったり土をつついたりして遊んでいました。とてもニワトリが楽しそうでした。わたしは、なでたりしてあげました。とてもうれしそうでした。(紋子)

以上に紹介した3人の児童の作文からは、ニワトリの気持ちを想像しながら飼育活動にあたっていた様子が伝わってきます。「相手の立場に立って考えて行動する」ということを飼育活動から学んだことが伺えます。

○ニワトリが外でさんぽをしているところを見ていると、何だか心が落ち着きます。クロベエ、ミルク、コッコがいてくれて本当によかったです。(大聖)

○なんでニワトリはかわいいんでしょうか。飼育をしているとすごく楽しくて、おもしろいです。時々、ニワトリのことについて考えることもありました。ニワトリはなぜトサカがあるのかなあと考えたときもありました。(依久美)

○ニワトリのたまごは小さくてかわいいたまごでした。さわってみたらたまごがあったかかったです。ニワトリがたまごをうむ時いたいのかなあとと思いました。(珠里)

○初めてやったときに、ニワトリのたまごを見ました。さわってみたら、たまごはとても温かくてびっくりした思い出があります。(麻耶)

以上に紹介した4人の児童の作文からは「相手や自分の命を大切にする」ということを飼育活動から学んだことが伺えます。

現在、学校現場では「キャリア教育」「働く喜びの醸成」が謳われています。同様に、道徳教育の充実ということについても強く言われ、現場の教員が何かと追い込まれています。しかし、これらの作文から私は、健全な形で充実した飼育活動が展開できれば、キャリア教育、道徳教育で期待する子どもの姿は、飼育活動で十分育てることが

可能ではないかと考えています。

4 終わりに

7月の協議会で発表させていただいた際に、多くの方から質問や感想をお寄せいただきました。この場をお借りしてお礼申しあげます。

現在は6年生になったこの4年2組の子どもたちですが、私は現在も教科担任としてこの子どもたちと接し、その成長ぶりに驚かされながら、現在も良好な関係を継続できています。担任時代に「飼育」という共通の目標をもち、共にがんばったという心の繋がりが今も続いているように私は思います。

これまでの担任時代を振り返っても、子どもと担任の共通で目指す目標が的確に設定できた時の学級経営は円滑に進みます。そして、その目標は学習面でも運動面でも生活面でも、何でもよいのかも知れませんが、「動物飼育」が目標だった場合、そのゴールは「動物の喜ぶ姿」や「動物の安らぐ姿」になります。そのため、学級全体が優しい雰囲気に包まれながら目標達成へむけて取り組むことができました。「忘れ物ゼロ」とか「漢字テスト全員満点」がゴールだった頃の学級の雰囲気とは雲泥の差でした。このことは私にとって大きな財産となりましたし誇りにもなっています。この子たちの担任を終えたあと私は、研究主任となり学級担任から外れました。再び担任に戻る際には、また動物飼育を子どもたちとの共通の目標にしたいと思っています。

学習指導要領が改訂され、解説には動物飼育に関する記述も勿論あります。動物の「死」について目を背けることなく受け止め、命について学ぶ機会に…といった内容の記述があります。これについての異論は全くありませんが、現場の教員の言動を見聞きしていると「動物が死を見せることが教育だ。だから死ぬのは仕方ない」と曲解されているのではないかという危惧を感じています。動物の死から何かを学ぶことができるの、動物が死なないように必死になってお世話し、それでも死んでしまった場合だけであると思います。「死んでもいい」と思いながら育てた動物が死んだところで、そこから学ぶものは何もありません。この点については、どうしても述べておきたく本題とは関係ありませんが記させていただきました。

(花巻市立矢沢小学校教諭)